

# OPEN SITE

## OPEN SITE 9 | 応募 279 企画から選出した全 8 企画決定 !!

あらゆる表現活動が集まるプラットフォームの構築を目指し、2016 年より始まったトーキョーアーツアンドスペース (TOKAS) の企画公募プログラム「OPEN SITE」の 2024 年度実施企画が決定しました。

2024 年 2 月から 3 月にかけて実施した公募では 279 企画が集まり、書類審査と面接審査を経て展示部門 4 企画、パフォーマンス部門 2 企画、dot 部門 1 企画を選出しました。さらに TOKAS 推奨プログラムを加えた全 8 企画を、2024 年 11 月から 2025 年 2 月まで 2 会期にわたり開催します。

時代を反映した独自の視点で、これまでにない表現を探求する創造的な企画にご期待ください！

### 開催概要

プログラム名：OPEN SITE 9

実施期間：Part 1 2024 年 11 月 23 日 (土・祝) - 12 月 22 日 (日)

Part 2 2025 年 1 月 11 日 (土) - 2 月 9 日 (日)

会場：トーキョーアーツアンドスペース本郷 (東京都文京区本郷 2-4-16)

休館日：月曜日 (1 月 13 日は開館)、1 月 14 日 (火)

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 トーキョーアーツアンドスペース

ウェブサイト：<https://www.tokyoartsandspace.jp/>

### 募集概要

募集期間：2024 年 2 月 28 日 (水) - 3 月 30 日 (土)

応募総数：279 企画

審査員：岸本佳子 (BUoY 芸術監督)

小林晴夫 (blanClass ディレクター)

畠中実 (NTT インターコミュニケーション・センター [ICC] 主任学芸員)

近藤由紀 (トーキョーアーツアンドスペース プログラムディレクター)

< お問い合わせ >

〒135-0022 東京都江東区三好 4-1-1 東京都現代美術館内

トーキョーアーツアンドスペース (公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館)

広報担当：舟橋、市川、武智

TEL：03-5245-1142 FAX：03-5245-1154 E-mail：press@tokyoartsandspace.jp

## 実施企画

「OPEN SITE 9」では、企画の内容に合わせて3部門の実施形態を設定しています。  
各企画のタイトル等詳細は変更となる場合があります。

## 展示部門

開館時間：11:00 - 19:00。入場無料。

各会期初日には公募審査員をゲストに迎え、オープニング・トークを実施します。

### Part 1: 2024年11月23日（土・祝）－12月22日（日）

企画者：ハビエル・ゴンザレス・ペッシュ (Javier González Pesce)

企画名：mundo

概要：9名のチリのアーティストによる展示。人間と自然とのつながりと、これらの領域に政治が媒介することを、現在過去未来を含めたさまざまな視点から提示する。

企画者：COM\_COURSE（代表：久保田荻須智広）

企画名：その姿の探し方

概要：久保田荻須智広の実家で発見された、洋画家・荻須高德の署名入りの一枚の絵画の調査を起点に、美術史家の吉村真とともに、断片的かつフィクショナルな歴史と記憶の空間化を試みる。

### Part 2: 2025年1月11日（土）－2月9日（日）

企画者：滝戸ドリタ

企画名：Efficiency of Mutualism（仮）

概要：生物発電によって、エネルギーを植物へ還す円環の相利共生を表現する。本来あるべき循環の姿とともに、人間の道具としての電気と自然との関わりを再考する機会を提示する。

企画者：KANTO（代表：佐藤浩一）

企画名：水の博物館（仮）

概要：多摩地域の水環境の変遷と、環境と人間の相互作用についてのフィールド・ワークやリサーチから発展させた映像作品や資料展示をととして、生活圏内におけるエコロジカルな諸問題を思考する。

**パフォーマンス部門**

会期中、特定の日時に開催します。鑑賞には事前予約と入場料が必要です。

実施日程や入場料金、予約方法等の詳細は、後日 TOKAS のウェブサイトおよびチラシにて発表します。

**Part 2: 2025 年 1 月 21 日 (火) – 1 月 26 日 (日) ※会場使用期間**

企画者：中川麻央

企画名：Magnetic Contradictions

概要：時代の流れや社会の枠組みによって変容する身体。インスタレーションとパフォーマンスを通じ、展示空間や建物をも媒体に変化していく身体の実現象を空間に立ち上がらせ、身体とその概念の認識と拡張を試みる。

**Part 2: 2025 年 2 月 4 日 (火) – 2 月 9 日 (日) ※会場使用期間**

企画者：現代サーカス集団 RUTeN (代表：吉田亜希)

企画名：砂上の楼閣 -Re.creation-

概要：日常にありふれた素材を現代サーカスに取り入れ、想像力や記憶へのアプローチを試みる。自動化が進みアンバランスさを感じる現代の物理的障害に対して、サーカス特有の重力と向き合って出来た身体と空間やオブジェクトとの関係性で生まれる相互作用を駆使したバランスに変換していく。

**dot 部門**

会期中、特定の日時に開催します。入場無料。

**Part 1: 2024 年 12 月 17 日 (火) – 12 月 22 日 (日)**

企画者：そこからなにがみえる (遠藤幹大、草野なつか、玄宇民)

企画名：二画面上映会 (仮)

出展者：遠藤幹大、草野なつか、玄宇民

概要：上映形式のより自由な可能性と観客との新たなコミュニケーションを求めるコレクティブによる、2画面作品に限定した上映会やイベントを実施する。

**TOKAS 推奨プログラム**

公募企画に加え、TOKAS 企画によるプログラムを開催します。入場無料。

**Part 1: 2024 年 11 月 23 日 (土・祝) – 12 月 8 日 (日)**

企画者：柄澤健介

企画名：柄澤健介個展 (仮)

概要：チェーンソーで彫り込んだ木材と、パラフィンワックスを組み合わせた彫刻を中心に発表を行う柄澤健介。登山の経験をもとに制作された山河のように、自身の身体を尺度にした作品群により、モチーフ自体の悠久の時間と、素材の持つ耐久性を併せ持つことで、「現代」を捉えるだけにとどまらない、時流を超えた芸術作品の可能性を探求する。

## 審査員による総評

### 岸本佳子 (BUoY 芸術監督)

改めて、公募で集まった数多の企画を、限られた枠という「現実」に収めるために少数に選択するという行為の不可能性を強く感じた審査会だった。複数の審査員がいることでかなりの時間をかけて多角的に議論し検討するそのプロセスはとても豊かなものだったが、応募者と共有し得るのはそのプロセスのほんの一部であり、最終的に主たる情報として提供されるのは採択されたのか否かという「結論」の部分であるというのは少し残念な気がしている。言うまでもないことながら採択の論理はあくまでも相対的なものであり、まだ見ぬ企画を事前に評価するという不可能な営為を取って引き受けたその先に、そのまだ見ぬ企画が OPEN SITE という場を通して具現化するのを心から楽しみに待つと同時に、今回は止むにやまれぬ事情により採択には至らなかったまだ見ぬ企画もまた別の場を通して結実するであろう可能性にも期待したいと切に思う。

### 小林晴夫 (blanClass ディレクター)

OPEN SITE の特徴は何と言っても企画書を審査するところ。企画書にも印象があって、そこから色々と想像を巡らせるのだが、面接になると、また違ったパースペクティブが加わり、最後に実際の展示や上演などで、想像を超えてくるのか、裏切られるのか？という流れのゲームみたいなどころがある。審査員としては、なるべく馬鹿正直にこの流れの中に身を任せてきたつもりだが、やはり毎年、一喜一憂するところもあり、このゲームを征する表現とはどういうものなのかを考えてきた。今年は、そんな OPEN SITE のゲームの本質を理解しているような、よく練られた企画が特に多かった気がする。最終的に選ばれたものは、企画書のための企画ではなく、それぞれの表現が抱える問題にちゃんと向き合っていて、外側にも開いている。さらにすでに出来上がっている作品というより、TOKAS での発表が何かしらのチャレンジになるものが残ったように思う。

### 畠中実 (NTT インターコミュニケーション・センター [ICC] 主任学芸員)

この公募企画「OPEN SITE」がすでに9回を数えるということに驚きを感じるのと同時に、すでにタイトルからは消えてしまった EXPERIMENTAL\* ということの意味、しかし、それがこの公募における中心であり続けていることをあらためて考えている。展示、上演、対話、そして、美術、音楽、演劇、身体表現、ワークショップといった、発表形態や表現手法などのさまざまな要素が、たんにアーティストによる展覧会にとどまらず、同時代性を強く持ち、それといかに対峙しているかということによって、その企画が際立っていることが重要だ。

応募企画は、例外的であることが自覚されているかのように、そうした意識が強く感じられた。それゆえ、それぞれの企画は秀逸なものが少なくなく、審査は困難を極めた。結果は熟考の末のものではあるが、規定枠にこぼれてしまっただけでも言える。

アートであることにとどまらず、いかに現実社会との関係性を豊かに考えさせてくれるのか、採択企画が、TOKAS の他の公募企画との差異を垣間見せてくれると期待している。

\*2006年からトーキョーワンダーサイト(現 TOKAS)で実施していた「Tokyo Experimental Festival」と「展覧会企画公募」を2016年に統合し、「OPEN SITE」とした。

### 近藤由紀 (トーキョーアーツアンドスペース プログラムディレクター)

今回最終選考に残った企画は、評価も期待値も拮抗しているように感じられました。そのため採択するにあたり、審査員として OPEN SITE の趣旨である「実験的である」ことの意味、そしてその企画を TOKAS 本郷で実現する意義を改めて自分に問うてみました。メディアやアプローチの方法により、「実験的であること」はさまざまな仕方で発表形態に表れてきます。そこで、その企画が、企画者のアーティストとして、キュレーターとして、研究者としての軌跡の中で、どのような意味を持つのか、そして企画者がそのことにどのくらい自覚的なのかということを考えました。加えて、それを TOKAS 本郷で実施することの意義をひとつの基準として議論に臨みました。とはいえ、それぞれの審査員がそれぞれの視点と基準から下した評価は、確かにどれも納得できるものであり、最後まで意見が分かれませんでした。そうした議論を経て選ばれた8組の企画の実現が、私たちの予想を良い意味で超えてくることを期待しています。